

元気あおもり応援隊会議（首都圏）

日時：平成31年2月13日（水） 18時～
会場：ホテルグランドパレス

「元気あおもり応援隊会議（首都圏）」を平成31年2月13日（水）午後6時からホテルグランドパレス（東京都千代田区）で開催しました。

当日は、18名の応援隊の方々が参加し、会議では「『北海道・北東北の縄文遺跡群』世界文化遺産登録に向けた取組」をテーマに意見交換を行いました。

その概要は、次のとおりです。

（青森知事 三村申吾）

皆さん、こんばんは。

本日は、大変お忙しいなか、またお寒いなかでございますが、元気あおもり応援隊会議に御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。

皆様方には、それぞれのお立場から様々な場面で青森の元気づくりに御支援を賜っております。厚く御礼申し上げる次第であります。

さて、今年度は、「青森県基本計画未来を変える挑戦」の最終年度ということで、私自身、経済を回す仕組みづくりをはじめ、計画の総仕上げに全力で取り組んできたところであり、これまでの取組の成果が着実に現れてきております。

農林水産分野におきましては、平成29年の農業産出額が3年連続で3千億円を突破し、14年連続で東北トップを堅持いたしますとともに、りんごの販売額におきましては、4年連続で1千億円の大台を超えているところでございます。

新規の就農者数もこの5年間で1,340人に上っておりまして、今や青森県の農業は成長産業とも言える状況でございます。

観光分野におきましては、国際定期便の青森・天津線の就航、青森・ソウル線の増便、冬場は週5便という状態になっております。加えまして、本年の7月17日からは、エバー航空による、青森・台北線の定期便就航が予定されるなど、本県の国際航空路線は、近年、非常に充実をしてくれております。

そうした中、陸・海・空の交通手段を組み合わせました「立体観光」の推進によりまして、国内外から多くの観光客の方々にお越しいただきました。

特に昨年1月から11月までの外国人延べ宿泊者数は27万人を超えまして、過去最高を記録した一昨年の実績を上回っており、本県の観光地としての評価が益々高まってきたものと考え



えているところであります。

4月からは「青森県基本計画『選ばれる青森』への挑戦」が新たにスタートいたします。人口減少が進む中であっても、県民が安心して働き、暮らしていける持続可能な青森県づくりを進めるため、これまで以上に攻めの姿勢でチャレンジをし、学ぶ場所、働く場所、生きる場所として「選ばれる青森県」、農林水産品や観光など、様々な分野での価値が国内外から認められ「選ばれる青森県」を目指していきたいと考えているところであります。

また、世界文化遺産登録を目指しております「北海道・北東北の縄文遺跡群」につきましては、昨年7月の文化審議会世界文化遺産部会におきまして、ユネスコへの国内推薦候補に選定されており、先般、この選定結果につきまして、来年度の審議においても尊重する旨、文化庁から発表があったところです。要するに来年度、文化部門では一番ということでございます。来年度こそは、政府からユネスコに推薦されるものと確信しております。

県では、引き続き4道県及び関係市町の一層の連携のもと、2021年の登録実現に向けて全力で取り組むこととしており、本日は、この取組につきまして御説明をさせていただきます。

何卒、皆様方におかれましては、忌憚のない御意見、御提案を賜りますようお願い申し上げますとともに、私ども青森県のイメージアップや情報発信などへ一層のお力添えを重ねてお願い申し上げます、御挨拶とさせていただきます。

本日は、よろしく申し上げます。

【「北海道・北東北の縄文遺跡群」世界文化遺産登録に向けた取組について】

※世界文化遺産登録推進室長及び室長代理が、資料に基づき県の取組状況を説明

(知事)

いよいよ最終選考に残ったわけでございますから、あとはもう思い切り進むだけということでございます。

この段階ですと、地元はもちろんのこと、首都圏でも縄文というものをいかにして盛り上げていくか、ということになっておりまして、今日は是非、いろんな御意見をいただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

(松島克守氏)

コメントがあります。

率直に言うと、プレゼンテーションとして、1万年とか17箇所というボケちゃうんですよ。もっとキレがないと、日本人ならいいけども、外国人の心をつかむには、もっと尖ったものがないと。

僕は三内丸山遺跡に2回しか行ってないんだけど、あそこは完全に都市国家ですね。マチュピチュなんかも行きましたけど、はるかに規模がデカイですから。17というのを言うんだったら、ワンオブゼムだけでも世界最古の都市と。都市文明の方が、やっぱり鋭くなっていますよ。「何とか群」と、



いろいろあるよと説明すると、結局、寄せ集めじゃないの？というふうなイメージに、あくまでもイメージですよ。

都市文明、世界最古の都市という仮説で資料を洗い直した方が外国人の心をつかみやすい。今のままだと、のどかなプレゼンテーションなんだけど、漠然としていてインパクトがないと思いました。

メインストリートがある、ゴミ捨て場がある、シティホールがある、当時、5千年前で世界最大級の都市だったかもしれないですね。これは学者の方に聞かないと分からないですが、僕は2度行ってそう思いました。今の1万年とか17箇所というのは、縄文の5千年以上前はよく分からないわけだから、石器時代だって知らないわけですよ、1万年前なんだから。1万年ということによって、また信憑性を落とすしちゃうと。

それから、17、17というと、またそれも寄せ集めの鍋料理みたいになってしまうので、三内丸山をシャープに押し出した方がいいと思います。

(世界文化遺産登録推進室長)

貴重な御意見、ありがとうございました。

これは、世界遺産を目指す際に文化庁がまず自治体から提案を募集するわけですが、その際に単独ではなく、基本的には、群でもって提案をするというのが、そもそも要件であるということで、これはユネスコの考え方で、1つ1つの価値よりも、17集まることで大きな価値を発揮するという、1つの世界遺産の進め方、やり方に即して、今日は説明させていただいたものです。

(松島克守氏)

単独指定と言っているのではなく、17集めるのではなくて、真ん中にきちんとした世界最古の都市とかがないと。

(知事)

営業キャンペーンの時には絞り込んで。そういうのは私の分野ですから。

学術的には岡田室長がやって、営業的には私が。

(松島克守氏)

私は外資系でマーケティングをやっていたので、こういうのは外国人受けしないんですよ。審査になると、もっと外国人の心をしづかみにするような出し方をしないと。単独でやれということではない。

(知事)

ありがとうございました。

(司会)

それでは、テーマに関連する御提案をいただいた方から御発言を頂戴したいと思います。

はじめに石黒様からよろしく願いをいたします。

(石黒順子氏)

東洋学園大学の石黒でございます。



先ほどのお話の中で、首都圏がまだまだこれから盛り上がらないといけないということでしたが、私、かねて非常勤で行っておりました大学で、今年度から専任となりまして、いろいろ大学生も動かしやすいというところもございます。

ですので、私が貢献できることといたしましては、是非、生きた教材として御提供いただきながら、私共も学生を動かして、首都圏にある大学という役割で発信のお手伝いをさせていただいて、ウィンウィンな関係が構築できれば非常に嬉しいと思っておりますので、御認識いただければと思います。

(知事)

大変ありがたいです。

我が方、今までいろいろやってきたことを各担当から御説明します。

(世界文化遺産登録推進室)

貴重な御意見、ありがとうございます。

縄文遺跡に興味・関心を持って来てくださる方は、沢山いらっしゃるんですが、やはり御年輩の方が多いうことがございまして、大学生、若い方に沢山遺跡に来ていただいて、実際に見ていただくというのが、とても大事なことだと思っております。

最初、とっつき難いんですけども、来ていただくと、皆さん、凄くびっくりして、いろんなことを学んで帰っていただけているということがありまして、是非、ゼミの学生さんでも遺跡に足を運んでいただいて、本物を見に来ていただきたいと思っております。

よろしく願いいたします。

(観光企画課)

観光企画課では、情報発信を行っておりまして、ブログですとか、いろいろなメディアの方たちに対してもPR資料を作って情報発信をしておりますが、この情報発信をするにあたり、大学生の皆様とも何か一緒にやって、若い人たちに向けた発信ですとか、首都圏に向けた発信というのができたらいいなと思っておりますので、その際はどうぞよろしくお願いいたします。

(知事)

県庁内で、提案型、若手に提案してもらって、一定の審査をして良ければ、権限と財源とチームを与えて思いっきりやれという庁内ベンチャー事業をやっています。正直言うと、これまでは世界遺産登録を取りに行くのに総力でしたが、今年は若手職員から、世界遺産登録を見据えて遺跡を巡るツアーだとか、そういう提案が出まして、その辺を進めることにしております。

その場面におきまして、一緒に連携できれば大変良いなど、そう感じるところです。

若い力、求めております。

東京でフォーラムを開催すると、平均年齢が高くて。嬉しいんですけど、やっぱり、若人よ縄文を心に抱け、という感じでございます。

(司会)

続きまして、大西様、よろしく願いいたします。

(大西達也氏)

大西でございます。

私自身が縄文に関しては、そんなに詳しくはありませぬし、専門でもないんですけども、この(縄文遺跡群ロゴマーク)バッジを改めて拝見しまして、新幹線の関係でアドバイザーに選んでいただいて活動してきましたラムダ作戦会議の前から、この縄文は含まれていたかなと思って思い出しておりました。



実は、ラムダ作戦会議、県の取組として、非常に異例のと言いますか、もう何年ですかね、新幹線の2年ほど前からスタートしていますから、かなり長く続いています。

ただ、やはり自治体での取組というのは、予算がベースでありますので、予算の切れ目が何とかの切れ目みたいなことにならなきゃいいなと思っていたんですけども、ラムダ作戦会議の場合には、そこから皆さんも、青森の方は御存知ですけども、マグロ女子会ですかね、民間の方々が自分たちでまずは連携してというふうな取組が生まれてきていますので、そういったものがこの縄文に関しても出てくるといいのかなと。

放っておいても出てこないとする、何か仕掛けていく必要があるのか。これは何の了解をとったわけではありませんけども、マグロ女子会さんも活動エリアが全く一緒ですし、何と言っても観光庁長官表彰で発信力が非常に強くなっていますから、まさにご当地発のタレントのような彼女たちが活動していく1つのツールとしてこういう縄文も加えて、上手く巻き込んでいけるといいんじゃないかなというふうに思っております。

それと、先ほど大学生の話があったんですけども、今日お配りいただいております「縄文土偶図鑑」などの宣伝材料は、広報広聴課さんから定期的に送っていただいています、いつもいただくと、周辺にいる小学生の子どもを持ったお母さんたちに配っております。

そうすると、非常に受けが良くて、学校の勉強云々じゃなく、自主学習に非常に良いと。かつ、そういった学習のために親が子どもを連れていきますということで、数はそんなに多くはありませんけども、お渡しした何家族かは、夏休みはこういうのを基に、青森、三内丸山に行ってきました、ということも報告を受けたりしております。東京事務所がありますので、こういう非常に出来の良いといえますか、小学生であれば、こんなのがあれば良かったと思うような、こういったものをできるだけ多くの子どもたちに届けていただけると、おそらく将来的な応援団になっていくんじゃないかなというふうに思います。

これは非常に出来がいいと思っていますので、送っていただければ、ビラまきは得意ですので、そういう貢献であれば、させていただければと思います。

(知事)

激励いただきましてありがとうございます。

ラムダ作戦会議も自主的にどんどん発展していきまして、おそらくそれが、縄文がワッと広がった縄文時代の雰囲気、そういう遺伝子的なものがあるんだと思いますね。特にマグロ女子会は、世界文化遺産登録推進室で、いろんなアイデアを出して次々やっていますし、私共、まるごと情報発信チーム等いろいろ作って、とにかく金をかけないで知恵と汗と足でキャンペーンしろという癖がついています。

(企画政策部長)

いつもいろいろとラムダ作戦会議をはじめとして、青森、それから道南地域の交流には、本当に御尽力いただいて感謝申し上げます。

先ほど、知事から庁内ベンチャーの話がございましたけども、私共、国内推薦といいますが、来年度、ユネスコへ行くということがほぼ決まって参りましたので、受入態勢の整備ということが非常に大事だと思っております。

特に遺跡の活用団体、それからガイドのスキルの向上に加えまして、県内に8つの構成資産、北海道道南地域には6つの構成資産、合わせて14の構成資産がありますので、できればこの構成資産を世界遺産の登録を契機に巡っていただくということが非常に大事になってくると。そういうことを通じて、交流人口を活発にしていくということが大事だと思っております。

そのためには、やはり二次交通の整備でありますとか、それから具体的にどういうふうなルートを巡ると非常に楽しいかというようなことと併せて、遺跡の周辺には食を始めいろんなコンテンツがありますので、その辺の情報をもう一度、ヘリテイジツーリズムといいますが、遺跡観光という視点の中で私共の観光資源を再構築、再整理するということが非常に大事になってくると思っております。

来年度から、徐々に、その辺のところは取り組んで参りたいと思いますが、御提言にもございましたマグロ女子会が実施しております「マグ女の青函博覧会」も非常に好評いただいておりますけども、意外なことに、あまり縄文に引っ掛けたようなコンテンツが今までなかったというのが正直なところでございます。これについては、先ほどお話し申し上げましたような、再整理する中で「マグ女の青函博覧会」の中に少しでもこの縄文のコンテンツが盛り込まれるような形で、私共としても取り組んで参りたいと思いますので、引き続き御支援、御協力をお願いしたいと思います。

(観光企画課)

マグロさんが実施されているイベントはいろいろ参加させていただいて、楽しませていただいております。

我々も情報発信する際に、マグロさんの行っているイベントなどをブログ等で発信しておりますけども、我々がこれから発信していこうと思っている縄文についても、マグロさんに御協力

をいただきながら、お互いに発信し合うような関係になっていければなと思っております。

(知事)

ということで、それぞれに頑張っている次第でございます。

(司会)

では、兼平様、よろしくお願いいたします。

(兼平慎氏)

兼平です。

1月27日のフォーラム、知事のパフォーマンス、非常に楽しませていただきまして、私は前の方に座っていましたが、後ろの参加者の方が物凄い数でびっくりしました。

それだけ縄文に興味を持っていらっしゃる方が一杯いるというのが、逆にいうと、凄く認知されているのかなと思いました。

この遺産を守ることと観光という、これが意外に相反するところがあるんですけども、ここをイコールにしていけないと、なかなかお金が落ちていかないというところ。

それと、日本人が本当に興味を持っているんだろうかということ。縄文と聞くと皆知っていると思うんですけども、本当に興味を持っているのか。

日本人が、どうしたら興味を持つのかということですか、世界へのPRというか、先ほど「世界最古の都市」って凄くいいなと思ったのですが、何かそういう強いメッセージというのが必要だなと思っていました。

この17箇所あるという、これもあまり知られていないんだと思うんです。これをもっと知っていただくために、17箇所に行くことの御利益というか、お遍路さんじゃないですけど。そこに行くことよっての御利益は何があるのかということ、これは観光というか、そういうところにつながってくるんだと思うんですけども。日本に来た、来ている方、青森県が今、非常に伸び率が高いと言われているんですけども、そういう方たちが縄文というものをどういうふうに感じているのかというのは、あまり聞こえてこない。

この縄文に対してのインセンティブがどのように作っていくかということ、ここは非常に大事なところなんだなと思います。

私が1月に岡田室長を訪ねて簡単に提案をさせていただいたのは、首都圏のどこかに、縄文を常に関じられる、感動できるような常設的な仕掛けを作って、ファンを作る、何かそういうことができると。例えば、青森県の物産ですとか、北海道の一番人気の物産ですとか、秋田、岩手もありますので、そういうところに協賛して、何かコンテンツを出していくとか。

縄文が東京で感じられて、外国人が来ても、縄文が自慢だから行きたいと。十何か所行くと、地元の人がお遍路さんみたいな形で数珠つなぎに巡っているようだとか。そういう地元の人が



非常に盛り上がっていることって、皆さん、行ってみたいと思うので、そこも是非強化しながら、首都圏に縄文の常設的なところ、仕掛けを作っていただきたいなというふうに思っております。

(知事)

ありがとうございます。

4道県、それぞれ首都圏に場所を持っているんですが、その辺も含めて今後、しっかり検討しなきゃいけないと思っています。

これまで、今まで国宝級の物が置ける施設がなく、展示できなかったんですが、ついこの間オープンしたんです。その辺を含め、各担当から御説明します。

(文化財保護課)

先ほど、知事から御紹介がありましたけども、三内丸山遺跡センターが今年の4月、来年度からいよいよ本格オープンいたします。企画展示室、地下の一般収蔵庫、特別収蔵庫、こちらで国宝もちゃんと収蔵できる施設です。

三内丸山遺跡では、これらの施設を使って、まずは遺跡に足を運んでいただいて、そこで縄文文化について理解していただくということを基本路線としております。

世界遺産の暫定一覧表に載るタイミングで、東京、大阪、福岡といったところで展示会も行いました。

世界遺産登録のタイミングでも、また同じようなこともやっていきたいなど。ただ、その時は、青森県ということではなくて、やはり北海道・北東北の縄文遺跡というふうな形での枠組みで何かできればなと思っています。

(知事)

パリのジャポニスム2018でも大変な好評でございまして、パリでも宣伝してきました。

(観光企画課)

今、お話がありましたように、新しい施設も出来ましたし、県内の縄文遺跡へ外国人の方にくさん来ていただきたいと思い、今年度から、海外メディアに向けた情報発信というのも行っており、縄文に関する資料も作ってPRしております。

また、先ほど申しました来年度のベンチャー事業で、海外でのプロモーションも実施したいというふうに考えておりますので、これから沢山、外国の方々がいらっしゃるように取組を進めて参りたいと思います。

(知事)

敵はパリでなく、味方はパリにありと言って、世界遺産登録を取るためには、凄い営業しなきゃいけないということをいろいろなお話を伺って改めて驚いておりました。

これまででは、物販は専門にやっていたんですけど、これからは文化もビシビシとやっていきます。

(世界文化遺産登録推進室長)

今、この北海道・北東北の縄文遺跡群に大体年間40万人の見学者が来ております。

ただ、そのうちの4分の3は三内丸山一極集中なので、三内丸山を中核として、他の遺跡群にどう人を回していくのか。

2番目の遺跡で大体3万弱ですから、これはまだまだ伸びしろがあると思っています。そのためにも、情報をきちんと発信をしていく必要があります。

それから、青森に来ていただいた時に、そこからどう現地に振り分けていくのか。そういった情報提供の拠点といったようなものも考えていかなければいけません。東京ですと常に情報はあるんですけど、やっぱり風化の速度も速いので、東京で登録を見据えた上での大きなイベント、あるいは展示会、巡回展といったようなものも、これは県単独ではなくて、民間の方々の協力を得ながら、とにかく話題性のある、企画性のある、そういったものを作らないと、やっぱり世界遺産効果というのは、1年、2年と言われていますので、その間にどれだけ周知徹底されるかということが1つの課題だというふうに考えております。その辺については、またいろいろと御助言いただければと思っています。

(知事)

いろんなアイデアが出ていまして、御朱印帳ブームだから回って歩いて何かやれないかとか、次々と我々には思いつかないようなアイデアが出ているんです。青森県の場合は、そういうアイデアを本当にやってしまう職員がいるので、何かいろいろ出てきそうです。企画政策部やベンチャーチームのアイデア、またどんどん出してキャンペーンさせていただきますが、またいろいろと御協力いただければと思っています。



ここからが勝負でございます。

(司会)

最後になりますが、山内様、よろしくお願いいいたします。

(山内史子氏)

物書きの山内と申します。

世界遺産ハンターというわけではないのですが、これまで暫定リストを含めると100件ぐらい世界遺産、国内外回っておりまして、その際の旅の記憶を今回思い出したものでお話をさせてください。

以前、エジプトのピラミッドを含め遺跡を回っている時に、ガイドの青年に「凄いよね」という話をして、「誇りに思う？」と聞いたんです。そうしたら「建物として凄いけども、僕は宗教が違うし、なんかね」みたいな「別に感動はないんだよ」みたいなことを軽く言われたんですよ。そういうものかと思って。

確かに、エジプトはイスラム教ですので、切り離れたものとして考えているんですね。その割

り切り方にもビックリしました。



その後、イスラエル、エルサレムに行った時に、ユダヤ教徒のお家でお話を伺う機会があったのですが、チラッとエジプトの写真が見えた時に、「これだよ、これ」というところから始まり、出エジプト記、モーゼの十戒を1時間にわたって聞かされました。

宗教の話が絡んでいますので、縄文と直接関わることではないと思いますし、また、どちらが良いということではないと思います。

ただ、今回の縄文に関しては、縄文時代という限られた時代だけではなくて、何らかの形で現代と、今の青森県とつなげていけないかと。その方がリアリティ、子どもたちにとっても、あるいは今住んでいる大人にとっても、リアリティが生じてくるのではないのかなと思っています。

例えば、日本酒造組合のデータで、縄文のDNAを持っていると酒が強いという正式なデータが出ておまして、そういう意味では、私も「縄文人」なのかなという感じなのですが。

縄文が大好きで是川遺跡に住みたいとおっしゃっている料理研究家の瀬尾幸子さんは、是川の在来種のツルマメが、ゆっくり時間をかけて東北一帯に広がっていった、それをたどりたいたいとおっしゃっています。そういう食べ物であったり植物であったり、何かしら過去とつながるキーワードを1つ1つ集めていくことで、何か失われた空間というものが埋められていくのではないかなと。

また、先ほどラムダ作戦会議のお話が出てきましたが、今回、北海道も加わっているということは、縄文時代は津軽海峡交流圏の先駆者ですので、立体観光にも確実につながってくるはずで

す。あとは、秋田、岩手、青森の東北3県、あと北海道がつながっているということは、弥生時代、あるいは大和政権によって否定とは言いませんけども、ないものにされた蝦夷の文化、それにつながってくるのではないかなと、改めてその認識をたどれると、またこれも現代につながってくると思うんです。

岩手出身の作家 高橋克彦さんが、大和政権の立場から見た歴史を東北の人たちは、教科書を通して学びますよね。それによって、自然のうちに劣等感を抱くのではないかと。というのも、蝦夷征伐から始まりますよね。そういうのが自然に「東北だから」みたいな、ちょっと一歩引いたような精神を生んでいるのではないかとという話をしていました。

ですので、縄文時代、あるいは現代につながる何かを誇りに思うことで、青森の子たちが「縄文って凄いんだよ」というような認識を持ってくれば、それはいろいろ世界遺産に対しての流れ、気運を強めることにもなると思いますし、また将来的に、青森にこんな素晴らしいものがある、僕たちは縄文の血を引いているんだよというようなことが言えれば、Iターンにも少なからず通じてくるのではないかなと思っています。

それに関連して、ちょっと情報とは離れるのですが、昨年末、芥川賞作家の大岡玲さんとお話した際に、とても皆様にお聞かせしたい言葉をおっしゃってくださりまして、「津軽弁を含む方言は、標準語が失った古代の魂やエネルギーをもっている。だから守っていかなければならない。」ということ強く熱くおっしゃっていたんですね。そういうのも、もしかしたら縄文とつ

ながってくるかもしれない。

とにかく、1つの時代だけではなくて、今に感じるリアリティ、それを何か伝えてくださると面白いなど、私自身が楽しみにしているのですけれども。

あともう1つ、これは一昨年のお話なのでもう時間が経ってしまっているのですが。ブリティッシュミュージアム（大英博物館）のキュレーターの方から、縄文展を是非またやらせてくれという、悲鳴のような声を預かっておりましたので、今、この場でお伝えさせていただきます。

（知事）

そんなにイギリスでも評判良かったんですか。

（山内氏）

凄く評判が良かったそうです。

数ある展示会の中でも、非常に多くお客様がいらしたということで、ブリティッシュミュージアムの日本館の中でも縄文のスペースというのは非常に幅を占めていますので、是非、フランスだけでなくイギリスでもよろしく願いいたします。

（知事）

フランスだけでなく、イギリスからも応援いただくことによって、一発で世界遺産登録されるように、いろいろと参考とさせていただきます。

今の青森と縄文をつなげることなどお話しいただいたわけですが、世界100箇所も巡った世界遺産フリークでいらっしゃって大変驚きました。

（県民生活文化課）

県民生活文化課の県史編さんグループの中園です。

20年間、青森県史を作ってきました、昨年度、刊行がようやく終わりました。その成果を踏まえて、今の質問に答えていきたいと思えます。

はっきり申し上げます。青森県を始めとして北海道・北東北に広がる縄文文化の特性は、現在もいろいろな形で継承されております。

北日本を中心とした人の移動や交流は、現在の青森県民も継続しております。その証拠の1つとして、アイヌ語の地名が青森県内に沢山残っております。奥戸（おこっぺ）、尾別（おっぺつ）、尻労（しっかり）など、日本語として読みにくい文字がかなり沢山あります。

これは、皆、アイヌ語の地名の影響です。ということは、アイヌ文化の影響を受けているわけで、アイヌ人との付き合いがあることになるわけです。これは学者の間でも共通する見解です。

有名なアイヌ語地名を紹介しましょう。下北半島の付け根に野辺地（のへじ）がございます。津軽半島の蓬田には瀬辺地（せへじ）があります。それから、北海道の渡島半島には茂辺地（もへじ）があります。辺地というのは川という意味で、実際に三つの地域には川があります。

これは、相互に共通の文化を持っている何よりの証拠であります。先ほど岡田室長から土器の話がありましたが、このアイヌ語文化の共通性も、この地域の特性とみることができます。

その後、アイヌとの交渉が少なくなって以降も、北海道とのご縁はずっと続いております。縄

文の人々が船で移動していた藩政時代、つまり江戸時代には、ニシン漁の漁業出稼ぎということで大量の漁民が北海道に渡っています。出稼ぎ漁は、その後、近代以降に北洋漁業へと受け継がれています。

それから、船の移動や交流ということで述べますと、青函連絡船による北海道と青森県の交流が盛んでした。青函連絡船全盛期の時代に「青函圏」という圏域が学問的にも定着しています。青函圏は、青森と函館を中心とした津軽海峡を挟んだ文化交流圏であり、まさしく縄文文化圏の近代・現代版といえるでしょう。

津軽海峡を挟んでいくつかの半島があります。夏泊半島、津軽半島、下北半島、そして亀田半島、松前半島、それから渡島半島。いずれも全部縄文文化圏に入りますが、この地域にはアイヌ語文化の観点から共通の地名がありますし、かつては漁民たちが相互に行き来をしていました。ですから、私はこれらの地域を「半島文化環状圏」というふうな形で紹介したことがあります。

南の方を向いてみますと、青森県と岩手、秋田、両県との交流も、縄文から現代に至るまでしっかり続いています。特に有名なのは、青森県南と岩手県北の付き合いです。今でも仲が良い間柄ですよ。両地域の間では婚姻関係も沢山あります。

西海岸と秋田県北との交流、今も根強いですね。能代に行きましたら、青森銀行とみちのく銀行が秋田の銀行より大きな建物で驚きました。能代の方に聞いたら、深浦や岩崎からたくさん人が来ますよとおっしゃっていました。交流が盛んな地域であることがわかります。

江戸時代にありました奥州街道というのは、近代以降国道4号になりますし、そのそばには東北本線が通っています。それから、日本海側の羽州街道は、近代以降国道7号になります。そのそばには奥羽本線が通っていますし、五能線も西海岸を走っていますよね。こういった交通機関によって人々が交流をしてきたわけです。

最近では、飛行機などの高速交通網のおかげで、青森県の人々が東京にも大分来られるようになりました。しかし、かつては北東北の縄文文化圏を中心とした移動が多かったと思います。

もう1つ付け加えておきたいことがあります。集団生活で仲間を大切にしながら生活してきた縄文人の精神文化というのは、実を言うと、このようなお隣さんやご近所の縁を大切にしてきた、青森県民の精神文化と非常に似ています。また青森県は大変雪が深く、ヤマセが吹き付ける地域でもあります。雪やヤマセなど、厳しい自然に直面してきた青森県民ですが、縄文の人々と同様に、しっかりと厳しい自然の中を生きてきて、成果を出しています。

青森県の特産物であるりんごは、特に南部りんごがそうですが、りんごはヤマセを克服して生産力を上げているのです。昭和の戦前期に三戸郡で生産が10倍以上増えています。

今日、りんごと言いますと津軽のイメージがありますが、東京ではブランドになっている紅玉が、実はヤマセに強いということが、当時の学問的な研究でしっかり実証されました。このため「南部りんご」として、南部地域でもりんごが沢山採れるようになったのです。りんごは、青森県の厳しい自然環境の中で戦ってきた青森県民が得た成果の1つと言えるでしょう。

このような紹介をしてきました歴史や文化を、残念ながら県民の皆さんはあまり知らないのです。何故かといいますと、学ぶ材料がないからです。しかし、幸いなことに青森県史ができたので、それを材料としていただければと思います。県史は実際に県民の間で好評です。今も新聞、雑誌等々で情報発信をしています。歴史に対する県民のニーズは非常に高いと感じています。

このようなことを通じて、縄文文化だけではなく、それ以降の青森県の歴史も考えていくことで、京都や奈良の歴史より古い時代から、我々は同じようなことをずっと続けてきて、今日までやってきたことがわかります。奈良や京都の文化だけが素晴らしいわけではなく、青森県の文化も素晴らしいものであることが認識できれば、気運も盛り上がるのではないかと考えています。

(知事)

縄文と今をどう伝えていくかとか。いろいろ大きなテーマだと思っているんですけども。

山内さんの話が幅広だったので、今日来ている他部局の職員も、それぞれ何かアイデアを。

(林政課長)

林業なんですけど、私がよく考えるのは、昔の人はどうやって木を切って加工したのかなど。ここが非常に難しい問題。ある程度、復元されてはいるでしょうけども。何かそういう体験も一緒にやれると、皆さん来て「これ、良かったな」と思えるのかなと思っていました。

今、林業女子会というものができたので、何か一緒にできるかもしれないなど。

(知事)

林業女子会とマグ女と一緒に。

今、土木では「キラキラドボジョの会」というのがあって、林業女子会があって、土地改良にも女子会ができて、マグ女もあるし、なでしこチームって民間のチームがあって、凄く女子が元気です。

(企画調整課)

我々、若い人たちに青森の魅力を伝えていかなきゃいけないということを問題意識として持っていて、こういう縄文のこととか、地元の高校生なども全然知らないことが多いので、北海道との交流も含めて、いろんな可能性が青森にはあるんだということを伝えていけるようにやっていきたいと考えております。

(知事)

縄文遺跡群が世界遺産になったらどうなるんだという考えもあるかもしれないのですが、我々としては、いろんな自信を持ちたいんですよ。世の中が全部東京、弥生東京だということから、凄く変わってきたんですよ。日本の多様性というんですか。「SDGs (エスディーゼズ)」※を言うんだったら、まさに縄文こそSDGsだ、というぐらいの迫力でいろんなことを発言していかなきゃいけないし、縄文の価値はこういうことだということを進めていきたいなと考えている次第でございます。

※2015年の国連サミットで採択された、持続可能な世界を実現するための国際目標

(松島克守氏)

これもプレゼンテーションなんだよね。

プレゼンテーションは、外国人のプロに頼まなきゃ駄目ですよ。外国人が良いねと思ってくれ

ないと意味がないんですよ。日本人が作っちゃうと日本人の感性で、これはいけない。

昔、石見銀山が世界遺産になりましたよね。あの時、町長はニュージーランドに行って、コンサルタントを雇ってプレゼンテーションを作らせて、それをやって私は取ってきました。

要するに外国人というのは感性が違うので、日本人の広告代理店だけじゃ駄目なんですよ。向こうのターゲット、アメリカかイギリスかフランスか。

(知事)

イコモスですから、どちらかといえばフランス方面。

(松島氏)

それであれば、フランスのエージェントに作ってもらわないと響かない。

(知事)

この間、フランスに行って向こうのエージェントに会いまして、響かせてきました。

(松島氏)

とにかく国内の話と全然違う世界だという助言です。

(知事)

土俵が違いすぎると。

(松島氏)

そう、全然違うんです。向こうに響かないわけ。

プレゼンテーションとか、イコモスで「いいね」と言ってもらわなきゃならないんですよ。国内はもう済んでいるんだから。

(知事)

非常に重要な、今日一番重要な話をさせていただきました。岡田室長、どうですか。

(世界文化遺産登録推進室長)

いろいろと戦略は考えています。

(司会)

ありがとうございました。

これをもちまして、県の取組説明と意見交換は終了させていただきます。

(知事)

どうもありがとうございました。